

のりものはくらんかい

岩 井 富 枝

◇クラスの概況

二年保育年長組 男子二十名 女子二十名

このクラスの子どもたちの家庭環境は、工場地帯を近くに控えての住宅地のために、サラリーマン家庭が大半で、電車や、学園バスで五分から十分位かかって通園している子どもたちで占められている。従って幼稚園生活も、自然、同方面のバスに乗って通う子ども同志が結びついて遊ぶということから出発している。四才の頃までは、数人の仲の良い子ども同志が、好きなことをして遊ぶという形で、毎日がくり返されていたが、五才になって、多勢で遊ぶことの楽しさが分るようになってきて、友だち関係も次第に広がってきたようである。

◇思いつきのきっかけと経過

十月のある日、木片を拾ってきたT君

が砂場で、それを電車にして遊んでいた。校内で建築があり、そこから拾ってきたという。なるほどそれらの木片は、生きた電車となつて数人の子どもを奪っていたようだった。

次の日M君が、「僕のはもっと長いんだ」といって、木片を片手に、いそいそと登園。(この頃年長のカリキュラムの中に、木工製作をしてみようという計画もあつて、一応ノコギリや、金槌などを部屋に用意してあつたので)私が、それにちよつとノコギリで先端を切つてあげたら、それが子どもに興味をそそつて、夢の超特急の創作に入つていった。

次の日、板・木片・釘と、ホツリホツリではあるが、材料が集まつて、子どもたちはつくつては、マジックやラッカーで塗り、あちこちに釘が打たれたりして、次から次へと電車が誕生し、車庫、信号機(三つの信号は、ボール紙のさし込みで色が変わるように大工さんにベニヤ板に穴をあけてもらった)も木片でつくられた。今までは、木片にマジックで色を塗る程度に終つて、それに釘を使うとか、切るとかの経験がなかつたために、新しい興味として、子どもたちの創作意欲をかきたてたらしかった。

又一方、組板で自動車をつくつたりして、しばらく、自動車や、電車あそびが雑然とではあるが、遊びの中で行なわれていた。その中では、積木で道路が組立てられたり、トンネルなどもできているが、一部の子どもに参加に終つてしまふ。特に女の子にも、その方

への興味を向けさせてあげたいと思ひ、ある日空箱を机の上でいじりながら女の子をさそひこみ、一緒に自動車を作ることができた。

女の子も男の子たちが作つた高速道路に、それを走らせてみるおもしろさを味わうことができたようだった。男の子は、ブルドーザーや、レーシングカーをつくりだし、いろいろ乗物がおもしろく工夫されてきたので、のりものについて皆で話し合う機会を持つてみた。

のりものには、自動車、電車の他、飛行機、船、それにロケットまで、子どもたちの乗物へのあこがれは、こちらで想像する以上のものであった。自由あそびの中で、三枚の模造紙を貼り合わせて、空、陸、海へわたつての、のりものについて、共同画をかいてみた。男の子が高速道路を画面一杯にかき、女の子は箱根で見たというケールカーをかこうとして、お山をかいた。

その時、子どもたちがお互いに話しながら生まれたものに、ジャングルがあつた。飛行機が海を越えて、ジャングルの方まで飛んで行くという。Y君が昨夜テレビで、ジャングルの住むライオン、ピューマなどのことを見たといつて、私に一生懸命話してくれた。そこでジャングルもかけるようにスペースをもうけた。みんな意外と、ジャングルに熱中した。高速道路からタワーも見えたし、いろいろなビルも見えたと、それらもかかれた。海には、船の他に港もかかれた。空には、ヘリコプターや、ジェット機の他に、人工衛星もとんだ。画面いっぱい、余す所なく、子どもたちの夢がかかれ

た。それを壁に貼ってあげると、みんな、お弁当を食べながらも、その話には、はながさいた。

翌日、ダンボールの箱を広げて敷いて、そこにラシャ紙で木を植えて、子どもの登園を待った。初めに入ってきたNさんYさんは、「先生これなあに！」と不審そうな顔、「ジャングルを作ろうと思うのよ！」と誘いかけて木を植えるのを手伝ってもらった。次々に部屋に入ってきた子どもは、カバンを降すと、のぞきにきた。色紙をまるめたりして、小さな木もたくさん植えられた。「僕はライオンをつくるよ！」、「私は兎よ」などと、へびやしまうまなども画用紙でつくられた。動物が立つようにするためにもいろいろ工夫され、紙をまるめて、足をつける方法を教えてあげたら、首の長いキリンや、ゾウもそれらしく生まれた。皆でそれに絵の具で色をつけ、ジャングルにおいてみたら、まるで動物の国ようになった。一方ダンボールを積み重ねて、皆で包装紙を貼り、色を塗って山をつくった。そこには、ミカンやリンゴの木が植えられ、オオカミなどの動物も同居していた。そんな山にケーブルカーの駅を箱でつくって、すえつけた。

空箱と、ストローなどでつくられたケーブルカーは、屋根の上につけたストローの間に、子どもたちで糸を通すことを考えだした。二人で糸の端を持ち、片方が椅子に乗って高くし、一方はしゃがむと、ケーブルカーがいかにも動いているようである。

それを、いくつもつくって、それだけで遊ぶ日もあったが、それを山につけるには、どうしたら良いかと数人の子どもと考えてみた。Y君が糸まきを使って、山と下の方の駅をつないで、こちらで操作する方法を考えだした。しかし実際、考えたようにやってみたが思うようにいかないで、何度も何度もやり直しながら、一応一人でも動かせることができるようなのが工夫された。

皆がつくったケーブルカーを、全部動かすには、重さのために糸が下って動かせないで、二つつけることを納得させるのにも大変だった。皆が、でき上ったケーブルカーを動かすのに、げんかになつてしまう位だった。山は、毎日の遊びで傾いては直すのに一苦労だった。

ガソリンスタンドは、糸巻と、ストローでタンクがつくられ、道路のわきに置かれて、ガソリンを入れると又走った。今度はお金を払って、ガソリンを入れてもらうことを思いつき、牛乳瓶のふたのお金で、女の子が油を入れてあげる役になったり、それだけでも結構楽しいらしかった。お菓子屋さんも、スタンドの横につくられたりした。

こういう建物については、みんな子どもたちと一緒にもう一度考え合ってみることにした。自分の住んでいる近くにどんな建物があるかと――工場、病院、学校、幼稚園、デパート、お店屋、郵便局、消防署……いろいろとだされた。これらをまとめながら、子ど

もたちにも、それらの建物の中で、どんな仕事をしているか、なぜ形式で簡単に説明した。子どもたちのだしたこれらのものは、社会の一部分にすぎないが、まだまだいろいろな建物があり、その中では、世の中のために、多勢の人たちが働いていることも、勤勞感謝の意味などもあわせて話したりした。

こうしてだされた建物を、六つとり上げて、子どもたちで好きなものを共同でつくることにしてみた。幼稚園、学校、お菓子屋、港、飛行場、デパートが、大小さまざまなボール箱などを持ち寄っては、子どもたちが考えながら一つ一つできていった。こういうグループでの製作を通して、今まで割合無口だった子どもも、独りあそびの好きな子どもも、つくりながら、塗りながら、友だちと話したり、考え合ったり、又仕事をするためにグループの仲間を呼びに行ったりしながら、交友関係も目立って広がり、深められていったようだった。

幼稚園は綿で砂場をと考えたり、屋上に芝生の遊び場ができたり、お花のトンネルがあったりして、みていて子どもの夢を感じさせられた。デパートはエレベーターが工夫され、一階から十階までつぐられ、それぞれの階で売られているものが絵で示されているもので、子どもらしい見方でつぐられていた。飛行場はちよつとむずかしいらしく、箱のフタを敷きつめた滑走路がそれらしくできた。飛行機は、小箱でつぐられておかれた。お菓子屋は、庭までついた

家ができて、こまごまとお菓子が並べられてあった。港の方は、この頃、燈台記念日があり、歌もうたったり話も聞いたたりしたので、子どもたちは、どうしても海に燈台をつけたいといい、港にそれごとりつけられた。大きな船は、はしけに毛糸で繫がれた。海はラシヤ紙でつくった。クレヨンや、絵の具で、波や、魚がかかれた。遠足で水族館を見できた経験も手伝って、クラスの皆が海に関心を示し、大ガメや、サメなど好んでかかれた。

又、図鑑を見ながら、セロファン紙にマジックで、魚や海の生物をかき、廊下の透かしガラスにセロテープで貼ったりした。一方、画用紙でつくった魚の口の辺に穴をあけて、ヒゴを折り曲げて釣るあそびも生まれたりした。

◇隣の組を招く

こうして海も賑やかになり、隣の年少組の人たちも盛んにのぞきにくるようになると、自分の組だけのごっこあそびに飽き足らなくなつて、「先生、小さい人たちに僕たちのつくつたものを見せてあげようよ」と子どもたちの中から声がでた。そこで、みんなで他のクラスの人たちを招待するのには、どうしたら良いかと話し合つてみた。ちよつど二週間位前に、松の組（年長組）で動物園をして招いて下さつたこともあつてか、子どもたちの中から、用意する看板や、切符なども作らなければと意見がだされた。さて、何といつて

招いて良いか子どもたちと相談することになった。「自動車ショーがいいよ」「そんなのおかしいな。電車もあるし……」等々、「交通博物館にしたら」の聲がでた時、S君が即座に「交通博物館で、乗物がいっぱいあって、古い汽車もあったし……」などと見てきたことを細かに話してくれた。しかしどうも、それには内容があてはまらないし、結局、のりものはくらんかい、にまとめてしまった。

最近文字も大分読めるようになった子どもたちは、のりものはくらんかいがいつ開かれるとか、いろいろかいたポスターをだした方がいいといひだす。そこで林の組で十一月六日、九時三十分から開かれるということを、あらかじめ私がまとめてかき、子どもたちはそれを見ながら、県命にマジックを握って、絵のような文字や、乗り物の絵を入れながら、ポスターや看板をどんどんつくった。それに、入場料は大人五十円小人三十円も加えられた。ポスターは二十枚かいた。

又、せっかく皆を招待するのだから、お土産をあげたいとの意見もでて、いろいろ考えたが、先日文化の日に菊の花のペンダントをつくって遊んだのがとても気に入っていたので、それをみんなですくってあげることにした。色紙と牛乳瓶のふたと毛糸でつくるペンダントは、それから大変忍耐のいる仕事だった。何しろ一人が十個つくることになり、子どもたちはあと何個だと数えながら県命につくった。入場券は、子どもたちがかいた下絵をもとにして、こちら

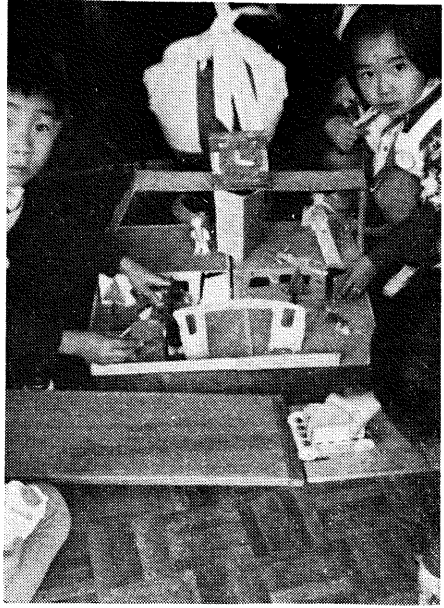
で刷って用意し、看板二枚も、みんなでかかり、入口と部屋の中に紙テープでつないで貼った。前日は、子どもたちで高速道路や、山のトンネルからでた線路などいろいろ組合わせながら、又つくった建物も並べてみたりして遊んだが、一度にみんなが手をだすので時間の都合でまとまりにくく、結局、私の意見が大分入ってしまった。

子どもたちが見易いようにすることが第一なので、子どもたちが帰ってしまった後、ベニヤの細長い板なども大工さんにもらったりして、子どもたちの意見も生かしながら、私が並べ変えてみた。当日の役割は、子どもたちとどんな役が必要かを話し合い、希望させることにした。

いよいよ当日、絶好の秋日和、子どもたちは勢い込んで部屋に入ってきた。そして、私が一応いろいろの製作物を並べておいたので、その中をキョロキョロ嬉しそうに歩きながら、自分の作った自動車はどこへいったのかなと探していた。ポスターは、子どもたちに、他のクラスの子どもたちの見易い所に貼ってきてもらった。

九時になると、もう入口に年長組の子どもたちが、自分でつくった紙のお金を持って並んで「早く開けて」と大騒ぎ、年少組にも、ポスターが貼られたと、そのうちぼつぼつ小さい組の人たちも集まってきた。開場までの三十分間は、とても気ぜわしかった。

四十名のクラスの役割は、券を売る人四名、切符を売る人三名、信号機係二名、ロープウエーの操作する人二名、案内する人十三



名、レコード係二名、お土産を渡す人七名に位置についてもらった。案内する人だけに、紙でつくった腕章をつけて、見物にきた人たちにすぐ分るようにした。レコードは、国際急行列車を時々かけては、それに合わせながらロープウェーを動かすことにした。

九時半開場

入ってきた人たちは、ロープウェーの方に気をとられて、うっかりシグナルの赤に変わったのを通り過ぎようとして注意される場面もあった。ほとんどの年少児は、細かい建物などに注意しないで、ロープウェーの動くのに興味を示すが、自分が交差道路の下をくぐっ

たりするのに気を奪われた形で、お土産をもらう方に一生懸命の様子だった。そこで、案内係に少し説明をすることを頼んでみた。子どもたちは、自分たちの作ったものをわかってもらおうとして顔を火照らせながら説明に果命だった。年長児の場合は、割合良く見ていて飛行場の批判や、東京タワーのエレベーターを見つけ、動かさせてなどの注文までしたり、作られた自動車にも手を触れてみたくて……というように反応が強かったようだった。途中希望で、役割も交代してやったりした。こうして九時半から約一時間に渡って張り切った子どもたちは、皆が帰っていった後で「くたびれちゃったけど、とてもおもしろかったね」ときさやき合っていた。





◇その後

それらの乗物は、子どもたちで存分に遊ばれ、海は積木で囲ったりして、磯釣りがはじめられた。いつのまにか、釣りやさんごっこが子どもたちの間に盛んになっていった。

◇感想と反省

「のりものはくらんかい」を通し、みんなが協力してつくる機会や、話し合いの場が多く持たれたりして、自己主張の多いこの時期に、協調してあそぶことのおもしろさを、子どもたちなりに理解できるところになったし、今までの割合少人数的グループでのあそびから、クラスの中の一員という自覚へ、さらに発展して、幼稚園という大きな集団の中の一人ということが理解されてきた。又自分の身近なものを見つめて、理解しようとする芽生えが育ってきたことは

収穫だったと思う。

何しろ予想以上にいろいろと発展して大きくなってしまったので、十六坪の保育室と三坪の廊下では、子どもが充分活動するには少し狭すぎた感じで、もう少し発展することを目指して場所を選定しておいたら、実際に組板でつくった大きな乗物を走らせるとか、交通のきよりとかをもっと大きくとり入れたものができたのではなかったかしらなどと反省している。

(洗足学園幼稚園)

幼児の教育 第六十五巻 第三号

三月号 © 定価六〇円

昭和四十一年二月二十五日 印刷

昭和四十一年三月 一日 発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします